

リレー随筆

「おいでませ山口」～山大生活を振り返って

鹿児島医療センター

白石 ゆり

はじめまして。鹿児島医療センター研修医の白石ゆりと申します。この度は貴重な執筆の機会をいただきありがとうございます。簡単に自己紹介をさせていただきますと、私は名古屋市生まれ鹿児島育ちですが、鹿児島以外で生活したことが2度あります。1度目は父の仕事の関係で幼稚園から小学2年生までをアメリカミズーリ州セントルイスで過ごしました。2度目は、山口大学への進学をきっかけに山口県に6年間住んでおりました。アメリカでの生活はとにかく楽しかったですが、20年ほど記憶を遡らなければならぬため、今回は、中山祐次郎先生著「悩め医学生～泣くな研修医5」の山口版にはなりえませんが、山大生活について書かせていただきたいと思います。

山口大学では、1年時は全学部生が山口市にある本学の吉田キャンパスに通います。医学部の同級生は120名で、郷里鹿児島から私以外に2名の入学者がいて、とても嬉しく安心したことを覚えています。本当にありがとうございました。

山口市は県庁所在地で人口は19万人程、室町時代に大内氏によって栄え「西の京」と謳われています。大内文化を伝える国宝・瑠璃光寺五重塔（日本三名塔の一つ！本当にすばらしいです）をはじめとする歴史的建造物あり、県を代表する長門峡という名勝地あり、一の坂川は桜の季節も美しく、天然記念物ゲンジボタルの生息地で初夏には幻想的な世界が広がることでも知られて

います。また、明治維新ゆかりの史跡も多くあります。

さて、想像以上に自然豊かな町で、吉田キャンパスも「緑豊かでのびのびした雰囲気と設備の整った研究施設とで、理想的な教育環境がひろがっています。」というホームページの言葉通り、のどかな場所にあり、私も毎日田んぼや山々を見ながら通学していました。吉田地区ですれ違う人のほとんどは大学生と言っても過言でないほど、学生の町でした。身近にあるのはスーパーとドラッグストアくらいで、遊ぶ場所はありません。医学部のほとんどの同級生が講義のない空き時間を有効に使って自動車学校にハードに通っていました。また、本学最寄りの駅近くに有名な湯田温泉街がありましたが、学生である私たちは高級温泉旅館に宿泊することなく、「ふく」料理をいただくことなく、友人たちと自転車で中原中也記念館や山口ザビエル記念堂等々の観光スポットを巡ったり、川内山形屋みたい!!な井筒屋デパートに行ったり、とにかく自転車が大活躍でした。片道30kmある秋芳台まで自転車で行った強者もいました。その友人は我がとれる、悟りが開けると言っていましたが、私は帰れる自信がなくて断りました。今思い返しても、1年時はみんな時間を持て余していて、それでものすごく元気・若かったのだなと思います。

大学生活を語る時に忘れてはならない!?サークルと部活ですが、「ほとんどの人が部活に入る」「部活に入っていないと試験

「情報がまわってこない」という噂があったため、見学で雰囲気の良かったことや元々音楽が好きだった（中学は吹奏楽部；チューバとトランペット、高校は音楽部；合唱）こともあり、私は軽音楽部に入りました。練習は週2回といわれていたのでサークル感覚で入部しましたが、実際はとても熱心で本格的な部活でした。部活は医学部のある宇部市の小串キャンパスがありました。車で片道1時間かかり、それも夜、と心配になるところですが、有り難いことに、私たちは医学部同窓会霜仁会の強力なバックアップ体制のもと、山口市と宇部市を往復する専用バスで移動ができます。夜ご飯を先輩たちが奢ってくださったり、お弁当を持たせてくださったり、部活に行くのはとても嬉しいものでした。山口大学医学部軽音楽部 Latin Echoes はビッグバンドでジャズを演奏しております。誰にも話していませんでしたが、私はちょっとかじったピアノ演奏にも憧れています。しかし、才能あるメンバー陣を見て直ぐに諦めがつき、初心者からテナーサックスを始めました。練習するのが楽しく、良い同期13人にも恵まれ、毎回楽しく部活に行っていました。初めての西日本医科学生音楽祭（通称西医）、初めての秋の定期演奏会、そして医学祭は、大学生ならではのイベントで、とてもワクワクしたものです。

2年生になると、医学部生は宇部市の小串キャンパスに移るので、吉田で一人暮らしをしていた人は殆どが引っ越します。私は運良く医学部正門前のワンルームマンションに引越できました。宇部市は工業と漁業が盛んな町で山口市とは雰囲気も違いましたが、身近にスーパーとドラッグストアがあり、生活に困らない点は同じでした。

山大医学部にはテスト期間というものが

なく、2年生は殆ど毎週月曜日が試験でした。講義、部活、試験のサイクルが永遠に続く感じで、私は毎週末を大学の図書館で過ごしていました。家が近かったことは何よりも有り難いことでした。部活では、可愛い後輩も入ってきて、ますます練習に力が入りました。試験に追われ、部活に追われた1年でしたが、宇部には美味しいお店がたくさんあったので、友人とご飯に行って新しいお店を開拓するという楽しみがありました。また、山口県は福岡県と広島県の間に位置するので、なんとかやりくりすれば、日帰りで福岡に買い物に行ったり、神戸や広島に観光に行ったりすることができると気づき、試験や部活の合間に縫って行っていました。

3年生の授業は7月まで、基盤系統一試験が終わったら、山大名物の自己開発コースに入ります。国外留学、国内留学もあり、皆それぞれに興味のある場で研究をさせていただける貴重な期間で、説明を受けた当初はアメリカに留学したいと思いましたが、部活では山大が西日本医科学生音楽祭（通称西医）の主管の年で、西医に参加したいという気持ちが強かったこともあります。学内に残ることにしました。自己開発コースでは医学教育学講座に半年間お世話になり、大動脈瘤治療法の開発研究をさせていただきました。少し具体的に申し上げますと、「マウスの腹腔内から採取したマクロファージを用いて、マクロファージにおける炎症とイタコン酸の作用が慢性炎症を抑制する仕組みを探る研究」でした。基本的な手技を一から丁寧に教えていただき、ウェスタンブロッティング、ザイモグラフィー、ELISA を用いた定量解析などを学ぶことができた貴重な機会でした。教授をはじめ先生方はとてもお忙しそうでしたが、いつも優しく丁寧にご指導ください

ました。教室の雰囲気もすばらしく、出勤時間・退勤時間もフレキシブルで、理想的な職場環境でした。毎日が充実した自己開発コースとなりました。

1月末から授業が再開、毎週試験の生活に再び戻り、4年生に進級後も11月まで毎週試験の生活は続きました。そんな中、部活では幹部学年になり、部活を運営する側の大変さと楽しさを知りました。軽音楽部で最大のイベントは年に2回春と秋に開催される演奏会であり、膨大な準備と練習を要しますが、その達成感がありました。バンドマスター／バンドミストレスの指揮のもと、ビッグバンドの曲や少人数で演奏するコンボの曲を仕上げていくのと同時に、裏では会場の確保＆打合せ、予算の決定、広告取り、パンフレット・チケット・ポスターの作成＆配布、OB・OGの先生への挨拶、日程（行程）表の作成などを部員の協力を得ながら進めます。春の演奏会は防府、下松、光、萩など毎年場所を変えて開催していましたが、秋は毎年宇部の渡辺翁記念会館で開催していました。渡辺翁記念会館は音響効果の優れたホールとして、来日される世界的音楽家の公演を数多く行われ高い評価を得ているほか、意匠的に優秀で歴史的価値の高い建造物として平成17年に国の重要文化財にも指定されています。そのような私たちにはもったいないホールは医学部キャンパスから徒歩5分の距離にあり、医学部の先生方や学生も多く足を運んでいただけたことが演奏会の成功の鍵だったと思います。

前述した西日本医科学生音楽祭は、山大と同じくジャズを演奏している大学が集まるイベントで、毎年10大学程が参加していました。西医体のように勝敗がつくものではありませんでしたが、他大学の上手な

演奏や、自分たちとは違うジャンルのジャズ演奏に刺激をもらえる貴重な機会でした。また、開催地の観光も毎年楽しく、西医があったお陰で伊勢神宮や長島スパランド、糸島、海遊館などに行くこともできました。山大が主管で下関での開催は幹部の先輩方はとにかく大変だったと思いますが、先輩方の指揮のもと皆で一丸となって運営に当たれたことも良い思い出です。

軽音楽部の活動としては他に医学祭での演奏や演奏バイトもありました。宇部の花火大会（県外から来る人もいるほど人気！）、竜王山公園の夜景、きらら浜での花火…と、気づけば宇部の観光も楽しんでいました。

12月にCBT（コンピュータベースド テスティング）をなんとか突破した後、1月からポリクリが始まりました。しかし、COVID-19の流行により、ポリクリ中止やオンライン・医局に行くのみの状況が続きました。時間は要しましたが、徐々に以前のような実習が可能となっていき、病院実習ができる有難みを感じたことを覚えています。

ここで私が医師を目指すきっかけになった出来事について少し触れさせてください。両親が医療従事者ということもあり医師という仕事は幼い頃から身近に感じていました。将来医師になりたいという思いが強くなったのは、中学1年生の時に病気になって、治療ができる病院を探して栃木県の病院を受診、主治医の先生の患者に寄り添う姿勢に心を強く打たれた時でした。先生から初めて手かざしを受けたり、神様のことを教えていただいたりもしました。先生は、西洋医学でも東洋医学でも手かざしでも患者さんが治るためだったら、楽になるのなら、全部何でもしてあげたいじゃな

いと飄々と語られました。人本来の治癒力を大切にし、靈・心・体に亘るサポートを心掛けていらっしゃる先生のおかげで、病院受診できない時でも心細さを感じることなく過ごすことができ、私も患者さんに寄り添える医師になりたいと思ったのです。COVID-19 の影響で、入院患者さんや施設に入所されている方のご家族は面会制限のためお見舞いに行けなかったり、最期まで会えなかったりという状況を耳にしたり、実際に私も体験しました。五類に移行した今は制限が緩和されてきています。様々に変化していく状況のなかでも、慈しみの心で人々の命が守られ安らげる世になってほしいと願ってやみません。

6年間山口で生活して分かったことは、住みやすいということでした。正直最初は不安もありましたが、生活に必要なものは身近にあるし、火山灰は降らないけど雪はたまに降ってくれるし、美味しいご飯屋さんはあるし、友人には恵まれるし、観光スポットもあるしと、「住めば都」でした。ちなみに山口・宇部以外で県内観光したのは、SNSでも絶景が話題となった角島大橋、赤と青と緑のコントラストが美しい元乃隅神社、約600年の歴史を持つ長門湯本温泉、幕末志士ゆかりの城下町が残る萩、特別天然記念物の秋芳洞と日本最大級のカルスト台地である秋吉台、学問の神様・菅原道真を祀る防府天満宮（毎年国試合格のお守りを買いに行きました）、名勝指定100周年を迎えた錦帯橋などなど。私は瀬戸内のハワイと呼ばれる周防大島と1年生の時から行きたいと思っていた唐戸市場に行きそびれたので、いつかりベンジしたいと思います。

山大生活を振り返って書かせていただきました。山口県、そして山口大学に興味を

お持ちいただけたり、山大卒の先輩の先生方に懐かしく想っていただけたりしたら幸いに存じます。

ぜひ皆さんも「おいでませ 山口へ」。

次号は、鹿児島医療センター／増田愛子先生のご執筆です。
(編集委員会)